



## 追悼 故 渡邊正昭 助手

渡邊正昭先生は、平成三年十月十四日結腸癌のため逝去されました。享年三十五歳、ここに慎んで哀悼の意を捧げます。渡邊先生は、昭和五十五年三月に愛媛大学医学部の二回生として御卒業になり、昭和五十五年四月に広島大学医学部整形外科に入局されました。一年間の大学での研修のち広島市民病院整形外科に二年間、その後広島鉄道病院に三年間勤務され、昭和六十一年四月より広島大学医学部附属病院整形外科の医員として、平成二年四月一日より助手として、主として股関節外科の診療と研究にあたられ、数多くの学会発表を行ってこられました。先生の性格は温厚篤実そのものであり、患者さんに対しては優しく接しられ、臨床医としてもすばらしい技量をもっておられました。先生が若くしてこのような病気になるのはまさに晴天の霹靂ですが、決してつらいとか苦しいとか弱音をはかれずに、最後まで股関節外来に出てこれられ診療にあたられた姿は本当に立派でした。三十代半ばで亡くなられ、やり残したことも多く、まさに無念であったと思います。これから御研究を一層深められ、御活躍されることを期待しておりましたのに、あまりに早く逝かれて残念です。

心より御冥福をお祈り致します。  
 (医学部整形外科学講座 村上 恒二)



## 追悼 故 長崎廣次 名誉教授

本学名誉教授長崎廣次先生(フランス語、フランス文学)は、去る十月十八日、脳梗塞のため永眠されました。享年八十三歳。ここに謹んで哀悼の意を表します。先生は昭和四十六年、広島大学を停年により退職、ご在職中はもちろん、死の床に至るまでバルザックの研究にうちこまれるという、文字通り学問一筋の一生をまっとうされました。長年にわたるご研究の成果が、浩瀚な書物として上梓される日も近いとうかがっています。その日を持たずして逝去されたことは、さぞお心残りであつたらうと胸が痛みます。とはいえ、実生活の先生は学問の鬼というより、フランス流洒脱の粋を身につけられた人柄で、わたしはフランス文学のよき時代を彷彿として思い浮かべたものでした。そのうえ先生は、書齋に閉じこもることのみをもってよしとする学者ではありませんでした。治安維持法に一挙手一投足までならまれながら、敢然として時流に抗されたエピソードの幾つかを、間接的にうかがっています。晩年に至るまで府中市を中心とした平和運動、この息の長い先生の行動の軌跡は、やはり対社会の姿勢を自己の生き方の根底に据えた、近代フランス文学の脈々たる精神の反映でしょうか。どうか先生、安らかな眠りにおつきください。

(総合科学部ヨーロッパ研究講座 戸田 吉信)